

## 富士紀行（14） 富士学校とは！

総火演も終了し、須走や演習場のススキの穂も一段と大きく白さを増してきた。今年の総火演は、近来にない好天気にも恵まれ、計画された全ての内容を展示出来た。射撃の迫力も増したし、幕間に実施した音楽隊と10榴弾砲礼砲隊との合同演奏も見事であった。

朝夕はめっきり涼しくなり、秋涼の候となった。「ススキ波、秋風立ちぬ、御山かな」である。今、手元に5千円札があったら裏を見て頂きたい。富士山が印刷されている。さて、その富士山は何処からの眺めであろうか。 解答は、文書末尾

富士山と須走についての記事が多かったので、ここらで陸上自衛隊富士学校に触れなければなるまい。

### 富士学校の概要

富士学校は、陸上自衛隊の15個ある学校の一つであるが、列国の軍隊にもみられない特別な学校であるといえよう。一般的には職種に関わる教育を行うために各職種学校が設置されているが、富士学校は、普通科、特科、機甲科それぞれ及び相互協同に関わる教育訓練、調査研究を行う所謂コンバインドアームズの学校として設立された。

それまで、別々に所在していた普通科学校（前川原）、特科学校（習志野）、特車教導隊（相馬原）を統合して、昭和29年（1954）に設立された。開校式は9月11日である。平成12年で開設46年になる。（設立の経緯等については、富士紀行（1）を参照。）

学校は、上述の設立目的を達するため、校長の下に、学校本部機能を果たす企画室、総務部、管理部を、職種に応ずる教育・研究機能を果たすため普通科部、特科部、機甲科部を、中長期的勝総合的な研究を担任する総合研究開発部、教育研究等の支援を担任する富士教導団（普通科教導連隊、特科教導隊、戦車教導隊、偵察教導隊、施設大隊で編成されている最新装備を保有する旅団級の部隊）、開発中の装備品等の実用試験を専門的に担任する装備開発実験隊及び富士訓練センターを運営する部隊訓練評価隊で、構成されており、主力を小山町須走の富士駐屯地に、一部を御殿場市の滝ヶ原駐屯地と山梨県南都留郡忍野村の北富士駐屯地に展開している。

学校は、要員養成等のため、まず学校、教育機関等に導入するとの方針に基づき、普通科、特科、機甲科の最新装備を保有している。

学生教育は、幹部及び曹士に対し、年間50数個の課程教育・集合訓練を行い、被教育者数は、年度により若干の変動はあるものの千数百名である。一年近い長い教育期間の課程もあれば、一月にも満たない期間の訓練もあり、100名を越える場合もあるかと思えば10名弱で教育訓練を行うこともあり様々である。

普・特・機の幹部は一度は富士学校の門をくぐるので、陸上自衛隊の幹部の4割が普・特・機の職種であること及びこららの職種が主導的な職種であることを考えると富士学校の役割の大きさを理解出来よう。

富士学校の校風は「明朗闊達和楽の間に進んで難局に当たれ」である。

名将は須く明るい性格であるといえる。そうでなくては部下をして死地に赴かせることは出来ない。又、作戦行動というのは、国家の存亡を掛けた戦いであり、個人の死を掛けた行動でもある。それだけに極めて厳しい修練が要求される。富士学校卒業者として、かかる宿命に敢然と挑戦すべしとの心意気を校風としたものであろう。

富士地区（富士駐屯地を中核として、北富士、滝ヶ原、板妻、駒門の5個駐屯地を総合して呼称する場合の一般的呼称）に所在する職員（家族を含む）学生と自衛官OBを併せると御殿場、小山町の総人口の2割弱を占めると言われている。

その状況を須走に限定してみると、平成12年7月1日現在、須走世帯数2438世帯、総人口5,073名に占める自衛隊関係者の（家族を含む）数は、約3,100（営内者を含む）であり、須走が如何に自衛隊の町であるかを物語っている。

富士学校は、最新装備の教育を含む各職種部隊の運用や実員指揮に関する教育訓練を主として実施しているが、それらの教育の中でも特筆すべきものとしては、レンジャー教育があろう。体力・気力・識能のギリギリの極限状況にあってなおかつ執念をもって任務達成しうるレンジャー隊員（幹部）を養成すると共に、教官教育を行っている。

自衛隊の訓練の中でもっともハードな訓練ではなかろうか。自分の弱さを認識できた者は強くなれる。全ての幹部がレンジャーと同等のレベルになければならない。そうでなければ熾烈な国土防衛策戦は戦えない。又国際貢献活動においてもレンジャー訓練で得たものは必ず役立っている。

解答：本栖湖北岸から撮影されたものである。